



TITLE:

# 犬の再生肝における肝動脈遮断に関する研究( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

野村, 一郎

---

CITATION:

野村, 一郎. 犬の再生肝における肝動脈遮断に関する研究. 京都大学, 1966, 医学博士

ISSUE DATE:

1966-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211779>

RIGHT:

氏 名	野 村 一 郎 の むら いち ろう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 253 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	犬の再生肝における肝動脈遮断に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教授 本 庄 一 夫 教授 木 村 忠 司 教授 伊 藤 鉄 夫

### 論 文 内 容 の 要 旨

肝動脈遮断後、動脈性副血行路の存在が、犬の生存に重要な因子であるかどうかを解明するために、肝切除後の再生肝に対する肝動脈遮断の影響を検討すると共に、その病態生理を正常肝の肝動脈遮断時のそれと比較検討した。

すなわち、肝再生犬肝動脈遮断後の生存率、肝の肉眼的、組織学的変化、肝機能検査及び動脈性副血行路検査を実施して、次の結果を得た。

- 1) 抗生物質の投与なしで、肝動脈遮断後正常犬群は、全例が2日以内に死亡したのに反し、肝再生犬群は60%が生存した。
- 2) 正常犬群の肝壊死範囲と比較して、肝再生犬群では、肝壊死範囲は小さい傾向にあった。しかも、正常犬肝動脈遮断後の壊死好発部位と一致せず、再生著しく、肝葉辺縁が鈍化している末梢部位では、殆んど壊死を認めなかった。
- 3) 正常犬の壊死好発部位である左下葉下端への大網縫着によって、副血行路を作成したにも拘らず、其の部位の壊死発生はまぬがれなかった。
- 4) 正常犬、肝再生犬共に、肝動脈遮断後の主たる組織学的所見は、肝内門脈及び肝静脈系のうつ血と、それに伴う肝小葉中心性の変化であった。
- 5) 肝機能検査で長期生存した肝再生犬は遮断後14日目に正常値に回復した。
- 6) 動脈撮影では、肝動脈遮断後少なくとも17日までは有効なる動脈性副血行路が証明されなかった。
- 7) 胸部大動脈墨汁注入によっても、正常犬群と肝再生犬群との間に遮断後、動脈性副血行路よりの肝への流入の差を認めなかった。
- 8) 血圧及び門脈圧測定では、正常犬群と肝再生犬群との間に有意の差を認めなかった。

以上の結果から、肝再生犬に、抗生物質の投与なしで肝動脈遮断を行なっても、60%が生存し、肝動脈遮断後、少なくとも17日までのものにおいては、その肝内循環は殆んど門脈血によつて行なわれているこ

とが判明した。

### 論文審査の結果の要旨

京大外科第一講座では、従来から大の肝動脈を遮断し、遮断後の病態生理について検討を加えてきた。

著者は肝広汎切除後の再生肝が肝動脈遮断に対しいかなる態度を示すかを追究した。

肝動脈遮断後正常犬は全例が2日以内に死亡するが、再生肝を有する犬はその60%が生存した。再生肝犬群では肝壊死の範囲が小さく、その発生部位も正常犬群の好発部位とことなり、再生の著明な肝葉辺縁が鈍化している部では壊死はほとんど認められない。

正常犬、再生肝犬ともに遮断後のおもな組織所見は肝内門脈系ならびに肝静脈系のうつ血と、それに伴う肝小葉中心性の変化である。

動脈撮影では、肝動脈遮断後すくなくとも17日までは有効な動脈性副血行路が証明されないが、肝機能検査では生存犬は14日目に正常値に回復する。胸部大動脈墨汁注入によっても正常犬と再生肝犬との間に遮断後、動脈性副血行路よりの肝への流入状態には差が認められない。

以上より、肝動脈遮断後の一定期間は肝再生群の生存犬ではその肝内循環はほとんど門脈血によって行なわれることが判明した。

本論文は学術上有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。